

逍遙点描

—絵と文・中嶋嶺雄—



リヴォフのオペラ座

(最終回)

二年前の秋、モスクワでの第六回日ソ円卓会議のあと、私は、リヴォフへの一泊小旅行に行く機会に恵まれた。リヴォフと言っても日本人にはまだ馴染みの薄い地名であろうが、そこはソ連邦ウクライナ共和国の西端、もうポーランド国境まで約60キロという位置にあり、最近ようやく外国人旅行者に「開放」されたばかりと言う人口170万の都市である。

かつて14世紀にはモンゴルの来襲を果敢に防いだこの地も、18世紀後半の第一次ポーランド分割でマリア・テレサ治下のオーストリア領となり、ハプスブルク家の文化的影響下に入った。今日ではソ連領に併合されてしまったが、モスクワやキエフと東西ヨーロッパとを結ぶ交通の要衝でもある。街中が石造りのリヴォフの町は紅葉に映え、あちこちにギリシャ正教会、カソリック教会、アルメニア教会などの古い建物が並んでいた。スターリンによる強制移住まではポーランド人が多く住んでいた都市だと言うだけに、ここがソ連かと思わせた。

私たちはこの都市の中心に位置するオペラ劇場へ案内されたが、ネオ・ルネッサンス様式のここのオペラ座は、1900年建立とのことで、彫像や壁画も目を見張るばかりであり、まさしくウィーンのオペラ座をそのまま少し小さくしただけと言ってよい見事なものであった。その夜は、出し物が「白鳥の湖」全幕のためか満席で、終演した時はもう夜の11時に近かったけれど、席を立つ聴衆は一人もいなかった。

翌日、市内を自由に散策する短い時間があったので、私は同行の人たちが買い物をしている合間に、このスケッチをものしたのである。私にとっても想い出深い一戦になった。

(東京外国語大学教授)

ASIA MONTHLY

東亞

1990

12

No. 282

金丸訪朝と今後の日朝関係

山岡邦彦

中国現代史の証言

盧山会議—毛沢東と彭德懷—

徳岡 仁

講演記録

日本と台湾・中国の関係

黄 昭 堂



KAZANKAI